

令和4年度
大阪府新学力テスト
(愛称:小学生すくすくウォッチ)
結果について

東大阪市教育委員会
学校教育部 学校教育推進室



令和4年 10 月

令和4年度 大阪府新学力テスト(愛称:小学生すくすくウォッチ)結果について

東大阪市教育委員会 学校教育部 学校教育推進室

◇調査の目的

子どもたち一人ひとりが、学びの基盤となる言語能力や読解力、情報活用能力等を向上させ、これからの予測困難な社会を生き抜く力を着実につける。

◇実施内容・実施期間及び実施人数

<u>実施内容</u>	5年生：国語・算数・理科・わくわく問題(教科横断型問題)・アンケート 6年生：わくわく問題(教科横断型問題)・アンケート 教職員：アンケート
<u>実施期間</u>	令和4年4月18日(月)～4月26日(火)
<u>実施人数</u>	5年生：3,396名 / 6年生：3,475名 / 合計：6,871名

◇テスト及びアンケート内容

《わくわく問題(教科横断型問題)について》(5、6年生共通問題:40分)

- 特定の教科の枠にとらわれず、複数の文章や資料から情報を読み取ったり、問いに対して判断の根拠や理由を明確にして自身の考えを表現したりする力を問う問題等
- 日常の活動や現代的な諸課題(SDGs・プログラミング的思考)等をテーマとして、文章やグラフ等の様々な資料を題材に、資料を読み取ったり、自分の考えを表現する力を問う問題
- 答えが一つでない問いもある

《各教科(国語・算数・理科)について》(各20分)

- 4年生までの学習内容から出題
- 当該学年までに定着すべき学習内容で、基礎的な知識及び技能とともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力を問う問題等
- 言語能力・読解力の基盤となる基礎的基本的な言葉等の理解や文章に書かれている意味を正確に捉える力(リーディングスキル)等

《アンケートについて》(20分)

- 児童自身の未来に向かう力(目標に向かって頑張る力、気持ちをコントロールする力、人と関わる力)、次の学びや生活にいかす力、好奇心等に関する内容や、学習状況、学級や授業等に関する意識等
- 家庭での様子等について

◇今年度の結果概要

教科横断型問題「わくわく問題」については、同一集団（令和3年度5年→令和4年度6年）を比較すると、前年度よりも改善が見られた。5・6年生ともに、自分の考えを自由に書くことはできていたが、図や表、グラフや文章等、複数の情報を読み取り、条件に従って、自分の考えをまとめることに課題があった。

教科問題については、国語（5年）では、文の意味を正しく捉え、適切な漢字を使って書くことはできていたが、文の中における主語と述語の関係に注意して、述語の部分を正しく書くことに課題があった。算数（5年）では、数量の関係を表すことはできていたが、2つの数量の関係を比べるとき、割合を用いる場合があることを理解するとともに、小数倍の計算をすることに課題があった。理科（5年）では、風の力の大きさとももの動き方の関係について、実験結果から考察することはできていたが、温度計を使った気温の測り方についての理解に課題があった。

アンケートについては、自己肯定感や他者理解に係る項目について肯定的回答率が高く、また、授業中にコンピューターやタブレットを使うことが日常的になっていることがうかがえる結果となった。

今後は、ICT機器も効果的に活用しながら、多様な子どもたちを誰一人取り残すことなく育成する「個別最適な学び」と、子どもたちの多様な個性を最大限に生かす「協働的な学び」の一体的な充実を図りながら、学びの基盤となる言語能力や読解力、情報活用能力等の向上をめざしていく。

<※今年度の平均正答率>

	東大阪市	大阪府
わくわく問題（5年）	56.3%	60.0%
わくわく問題（6年）	65.8%	69.0%
わくわく問題（5・6年合計）	61.1%	64.5%
国語（5年）	73.8%	76.8%
算数（5年）	38.3%	42.0%
理科（5年）	68.1%	72.2%



教科の結果

わくわく問題

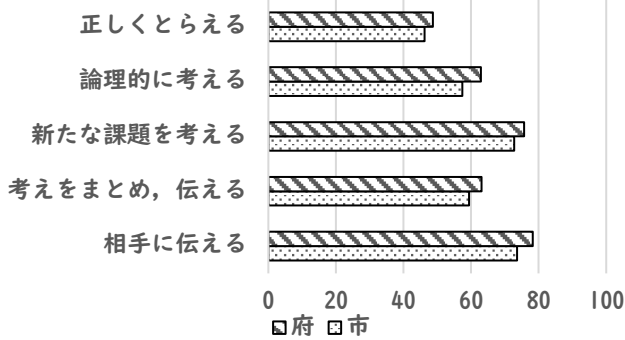
○同一集団(令和3年度5年→令和4年度6年)の平均正答率において府平均を100と換算した場合、3ポイント上昇した。

○表やグラフなどの複数のデータを比較し、項目間の関係を読み取ることに課題が見られる。

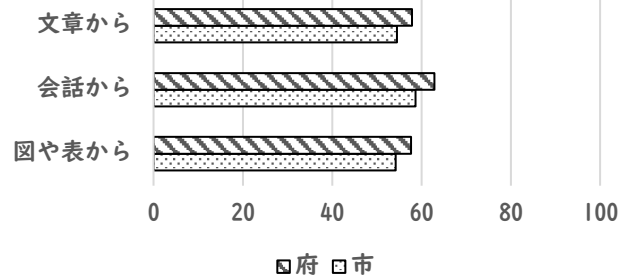
【5年生平均正答率】	R3 東大阪市 51.0%	大阪府 55.1%
	R4 東大阪市 56.3%	大阪府 60.0%
【6年生平均正答率】	R3 東大阪市 60.4%	大阪府 65.1%
	R4 東大阪市 65.8%	大阪府 69.0%

(5年生) 問題の観点・問題をとらえる力・伝える力・問題形式の平均正答率

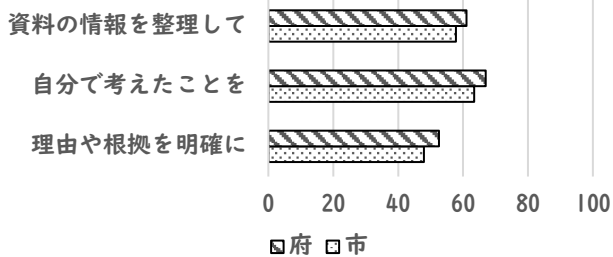
問題の観点



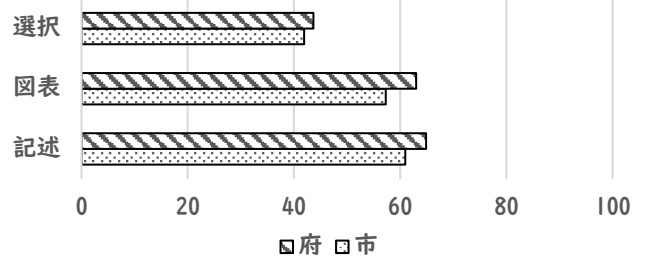
問題をとらえる力



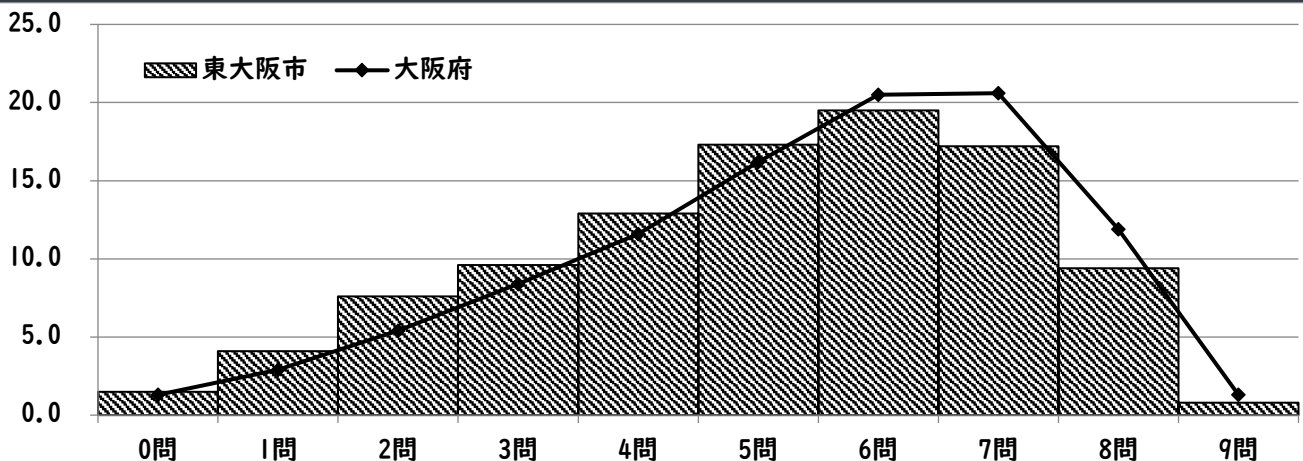
伝える力



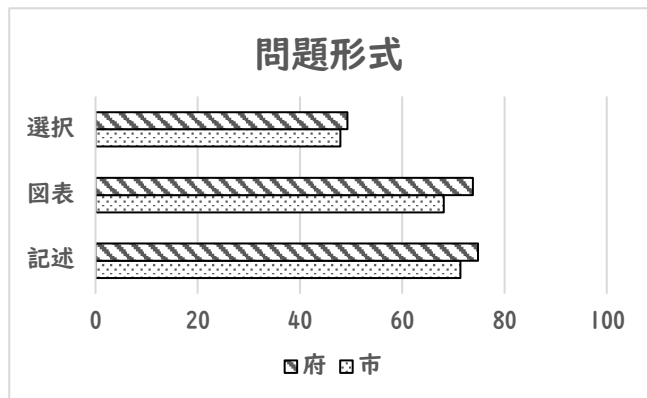
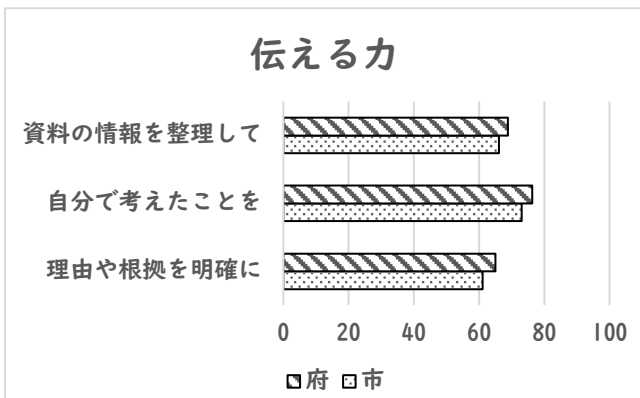
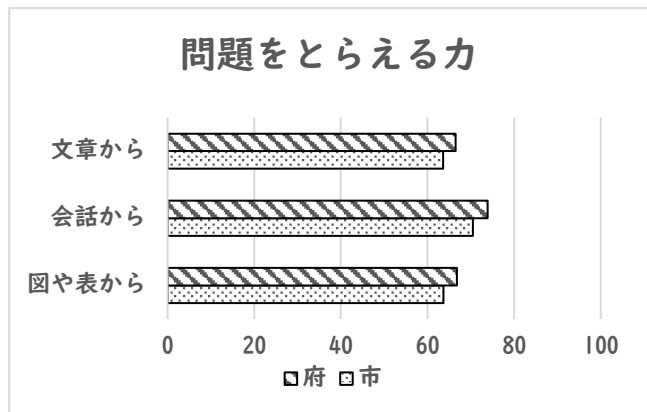
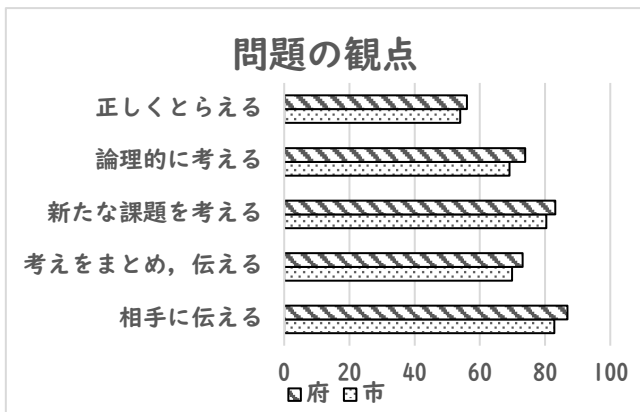
問題形式



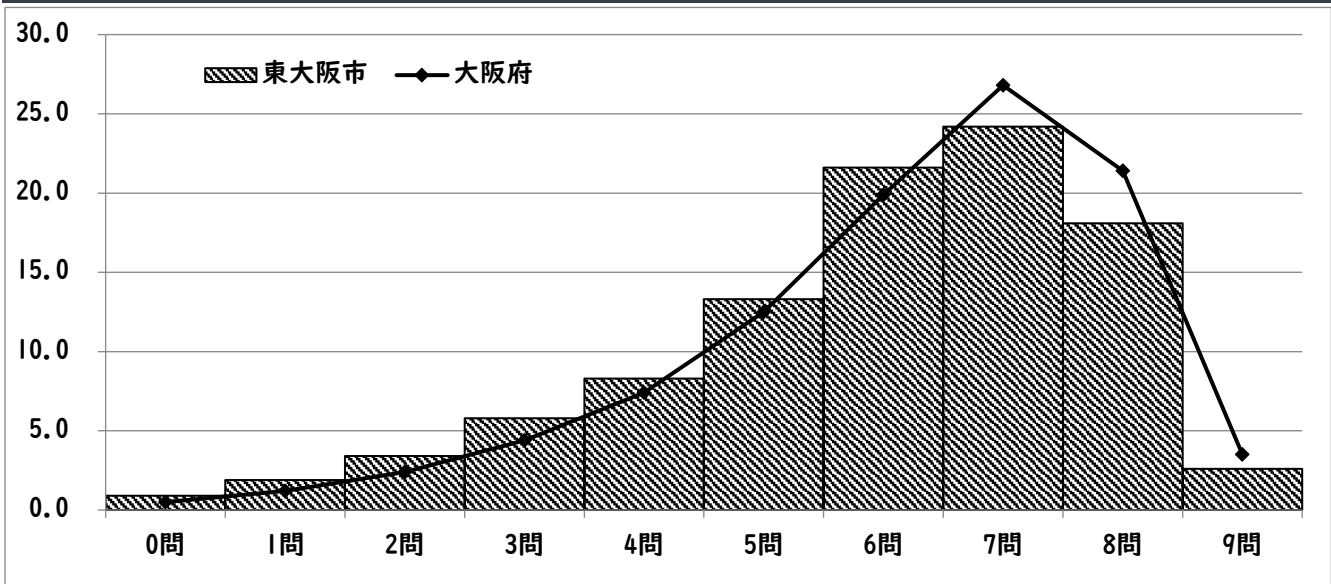
(5年生) 正答数分布



(6年生)問題の観点・問題をとらえる力・伝える力・問題形式の平均正答率



(6年生)正答数分布



5・6年生のグラフから

- 5年生、6年生ともに「問題の観点」において、「図や表、グラフ、短い文章、会話文等に内容に関連付けて、正しくとらえる。」ことに課題が見られる。
- 正答数分布からは5年生は、6問をピークとしたなだらかな山型であるのに対し、6年生は、7問をピークとした傾斜が大きい山型である。

《平均正答率の低い問題》 大問 2 (2)

- ② たかしさんは、プレートの命令に従って自動で走るミニカーのコースを作って遊ぼうとしています。次の【説明書】には、ミニカーの進み方が書かれています。

【説明書】 ミニカーの進み方

ミニカーは、スイッチを入れると次のように進みます。

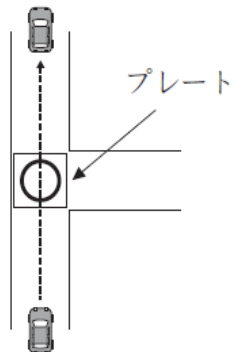
- ミニカーは前に進み、後ろには進みません。



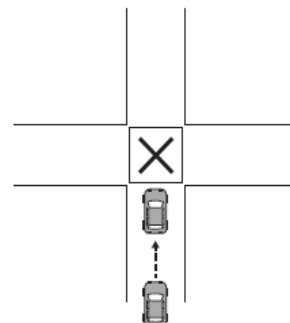
- コース上のプレートの種類に従って、次のように進みます。

プレートの種類： ○ , × , □ , △ の4種類

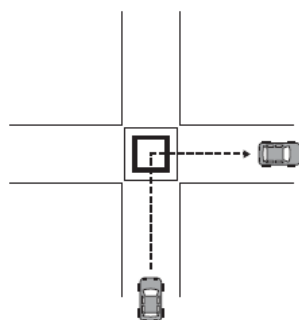
プレートのマークが○なら
曲がらずまっすぐ進む



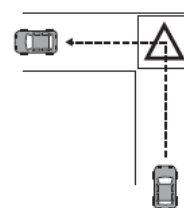
プレートのマークが×なら
プレートの手前で止まる



プレートのマークが□なら
プレートで右に曲がる



プレートのマークが△なら
プレートで左に曲がる



※プレートのマークの向きはミニカーの進み方に関係ありません。

※コース上の交差点や曲がり角には必ずプレートを置きます。

- (1) **問い** たかしさんは、下の図のスタートの位置でミニカーのスイッチを入れ★の位置でミニカーを停止させるコースを考えています。次の【条件】に従って、ミニカーが進むコースを1つ考え、空欄□部分にあてはまるプレートのマークを1つずつ書きましょう。

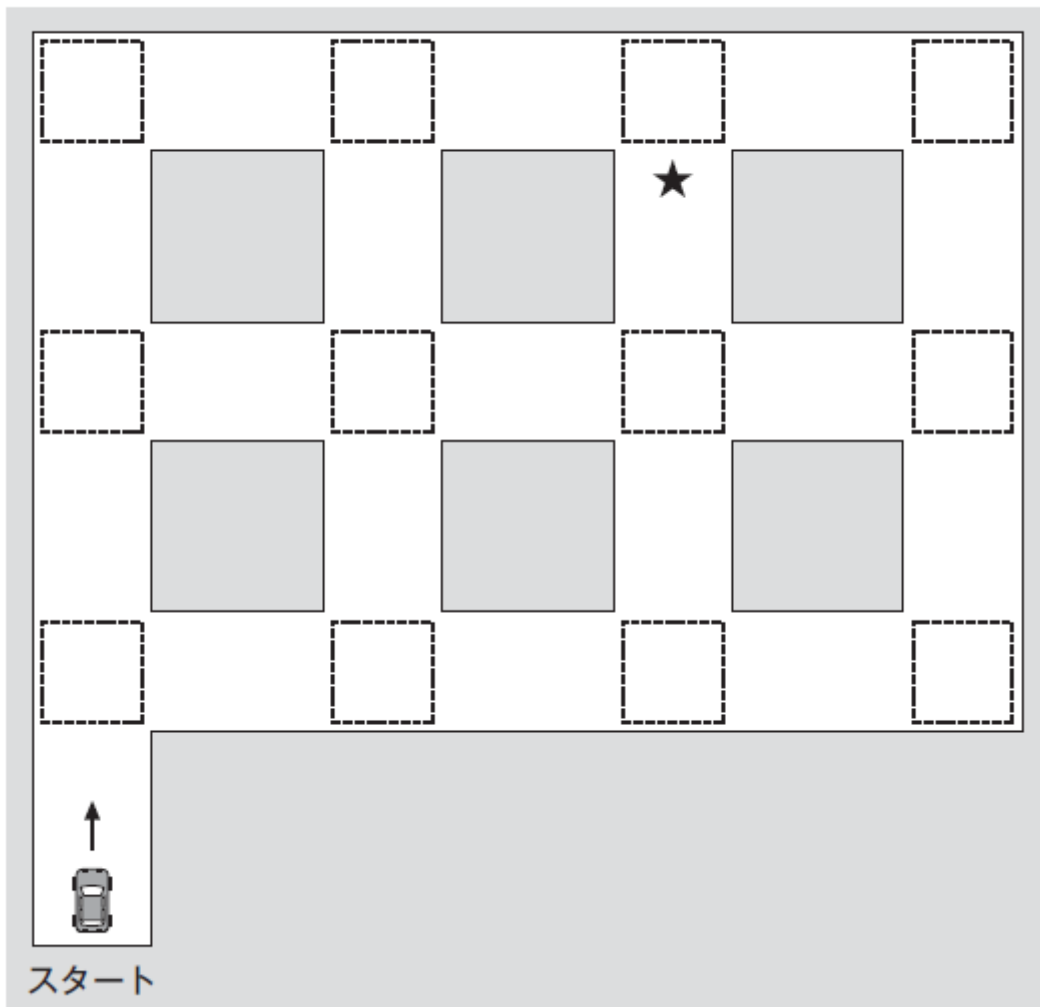
【条件】

次のプレートをすべて使うこと

○ … 2枚

× □ △ … それぞれ 1枚ずつ

※解答は、解答用紙に書きましょう。



(2) たかしさんは、ミニカーで遊んだあと、実際に人が使うため開発が進む「自動で動く車」について調べ、次の資料1を見つけました。

資料1 【「自動で動く車」の分類について】

「自動で動く車」は、運転の一部を車が助けてくれる「運転を支援する車」と、すべての運転を車が行う「自動運転車」の大きく2つに分かれます。

		内 容
自動で動く車	運転を支援する車	<p>アクセル※、ブレーキ、ハンドル操作のうち、一つまたは、複数を車が行う。</p> <p>【例】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前の車にぶつかりそうなときにブレーキ操作を自動で行う。 ・高速道路で、車線の中央を走るようにハンドル操作を自動で行う。 ・高速道路で、一定の速さで走るようにアクセル操作を自動で行う。
	自動運転車	<p>すべての運転を車が行う。</p> <p>ただし、高速道路など特定の場所でしか自動運転ができないなどの条件がある車もある。</p>

※アクセル…ペダルをふむと車が加速する装置。

次に、たかしさんは、「自動で動く車」が日本でどのくらい作られているのかを調べ、次の資料2を見つけました。

資料2 【日本で一年間に生産される「自動で動く車」の台数】

	2015年	2019年	2025年 (予想)	2030年 (予想)
運転を 支援する車	265万台	535万台	886万台	756万台
自動運転車	0台	0台	4万台	83万台

(富士キメラ総研「車載電装デバイス&コンポーネンツ総調査」により作成)

問 資料1, 資料2からわかることとして正しいものを、次のアからエまでの中から1つ選びましょう。

ア 「自動で動く車」は、2015年には生産されていない。

正答 イ 「自動で動く車」の生産台数は、2019年と比べると2030年は、304万台増えることが予想される。

ウ 「運転を支援する車」の生産台数は、2015年と比べると2030年は、3倍以上増えると予想される。

エ 2025年と2030年の予想生産台数を比べると、「運転を支援する車」は増えるが、「自動運転車」は減る。

- 問題の観点
図や表、グラフ、短い文章、会話文等の内容を関連付けて、正しくとらえる。
- 考えるための技法
「比較する」
- 誤答で多かった解答と選択した割合【正答はイ】
ア (5年生:東大阪市 55.9%、大阪府 57.1%) (6年生:東大阪市 55.6%、大阪府 53.4%)

【課題】

- 表やグラフなどの複数のデータを比較し、項目間の関係を読み取ること。

【指導改善のポイント】

- 日常生活の問題を解決するために、目的に応じて、表やグラフ等を読み取り、データの特徴や傾向に着目して考察することが重要である。そのために、表の意味や傾向を読み取ったりすることができるようにすることが大切である。また、非連続型テキストからさまざまな情報を正確に読み取る読解力を、全ての教科及び教育活動で意図的・計画的に育成していくことも肝要である。

教科問題

○国語の平均正答率が他の教科と比べ大阪府との差が最も小さい。

○理科の平均正答率が他の教科と比べ大阪府との差が最も大きい。

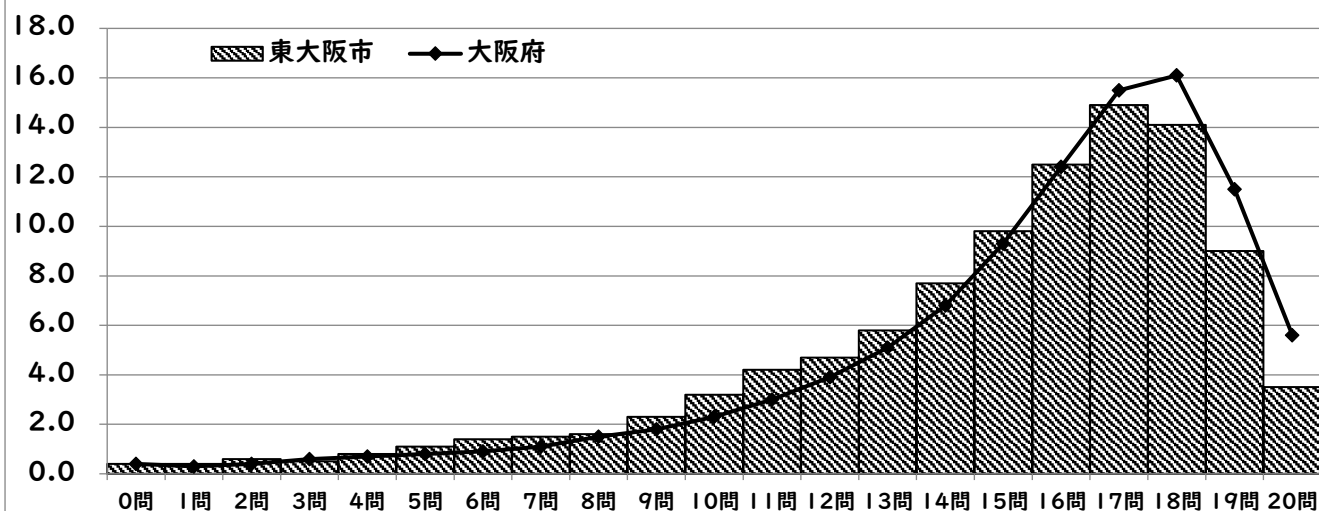
(大阪府との差) 国語:2.4% 算数3.7% 理科5.0%

【5年生国語平均正答率】

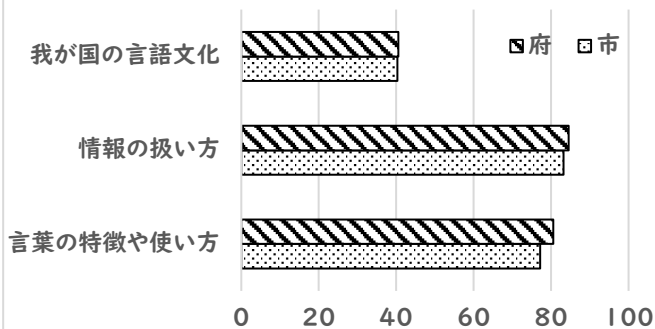
R3 東大阪市 79.2% 大阪府 81.6%

R4 東大阪市 73.8% 大阪府 76.8%

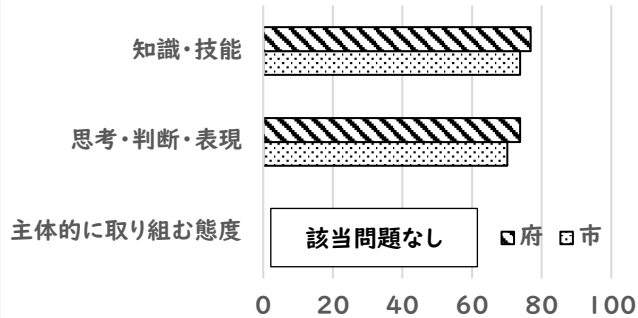
●国語 正答数分布



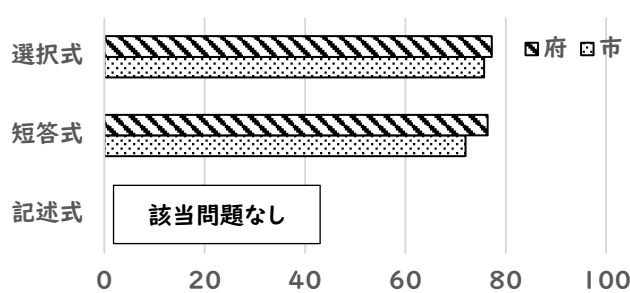
学習指導要領の領域等



評価の観点



問題形式



国語について

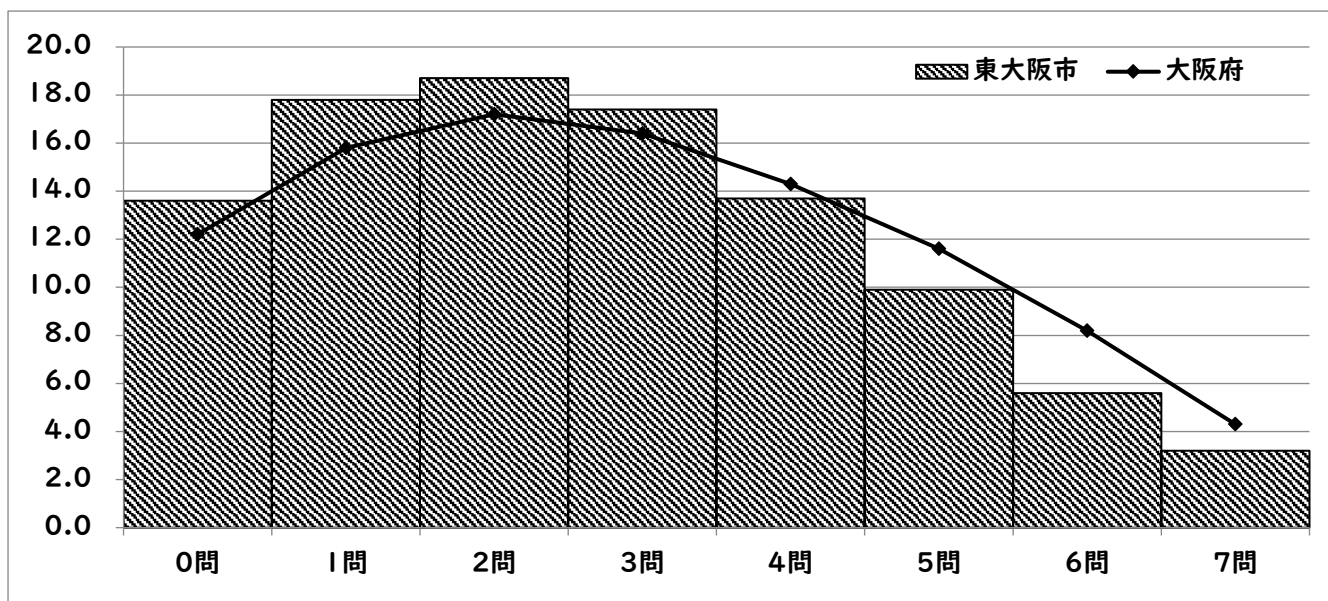
- 正答率の低かった問題・・・大問3(2)
東大阪市:13.2% 大阪府:23.5%
- 無回答率の高かった問題・・・大問4(2)
【「広島」をローマ字で書く問題】
東大阪市:18.1% 大阪府:9.9%

- 「ローマ字」を正しく読んだり、書いたりする問題や、「ことわざ」「故事成語」の意味を答える問題の正答率が他に比べ低かった。言語能力を支える語彙の段階的な獲得も含め、発達の段階に応じた言語能力の育成を図ることが求められる。

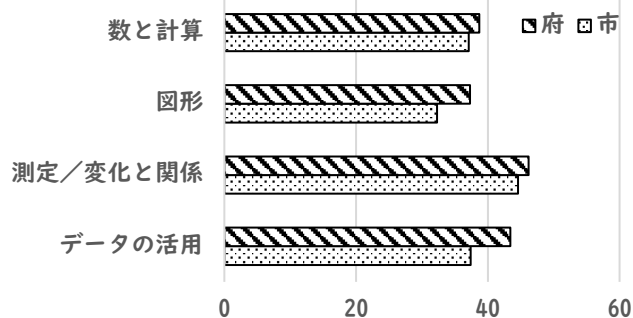
【5年生算数平均正答率】

R3 東大阪市 45.3% 大阪府 48.5%
 R4 東大阪市 38.3% 大阪府 42.0%

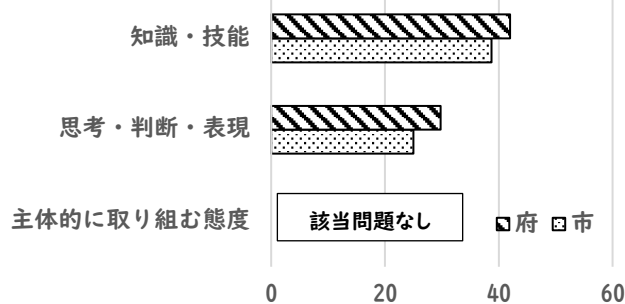
●算数 正答数分布



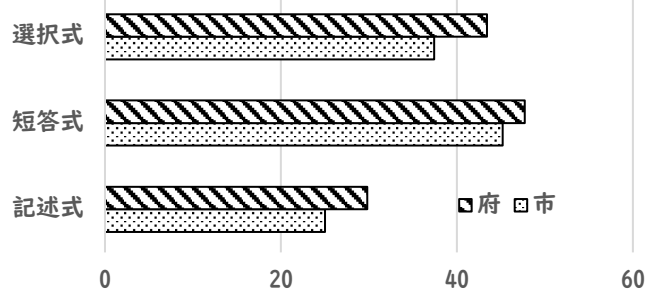
学習指導要領の領域等



評価の観点



問題形式



算数について

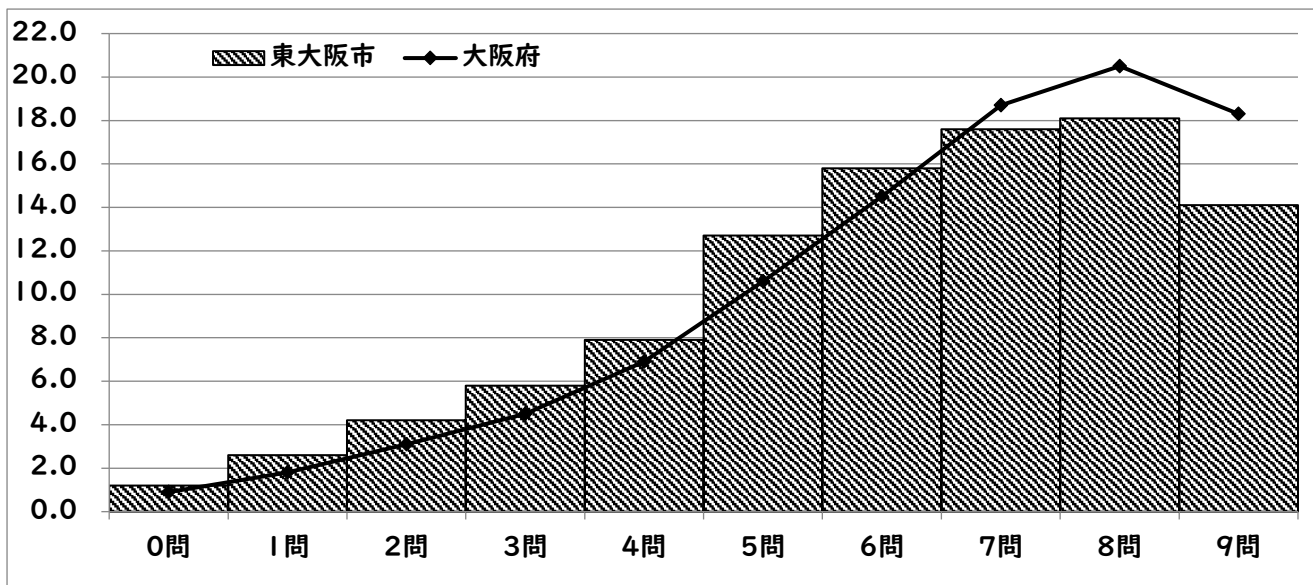
- 正答率の低かった問題・・・大問2(3)
 東大阪市:14.2% 大阪府:18.0%
- 無回答率の高かった問題・・・大問1(4)
 東大阪市:27.5% 大阪府:21.9%
- 記号を使って、関係を式で表す問題では、大阪府の平均正答率を7.8%上回っている

・学習指導要領の内容別の「データの活用」において、昨年度は大阪府の平均正答率を上回ったが、今年度は大阪府の平均正答率と差(6.0%)が大きかった。数学的活動を通して、データの分類を整理したり、各種グラフの特徴とそれらの用い方を理解したりする知識・技能を身につけることや事象の特徴に着目し、順序よく整理する観点を決めて、落ちや重なりなく調べる方法を考察する思考力・判断力・表現力を育成することが大切である。

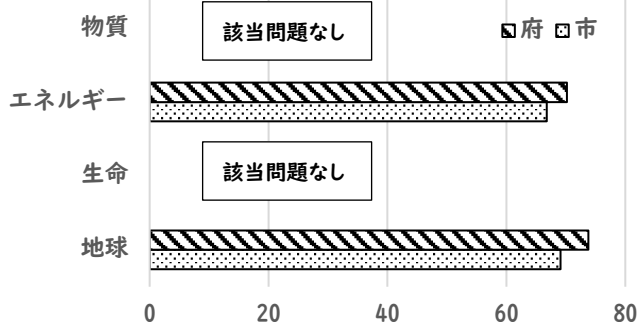
【5年生理科平均正答率】

R3 東大阪市 44.2% 大阪府 49.2%
 R4 東大阪市 68.1% 大阪府 72.2%

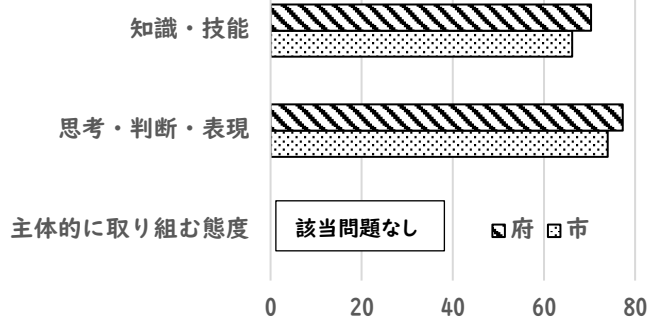
●理科 正答数分布



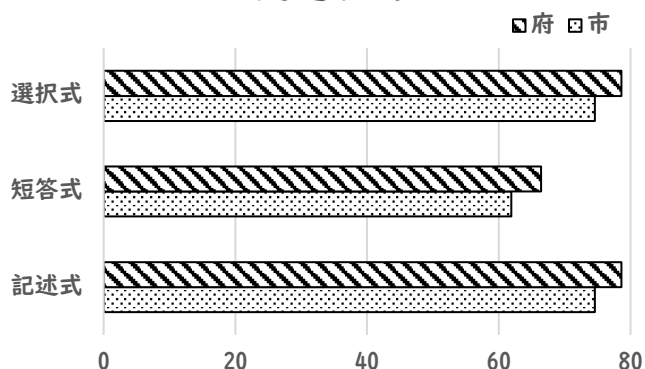
学習指導要領の内容



評価の観点



問題形式



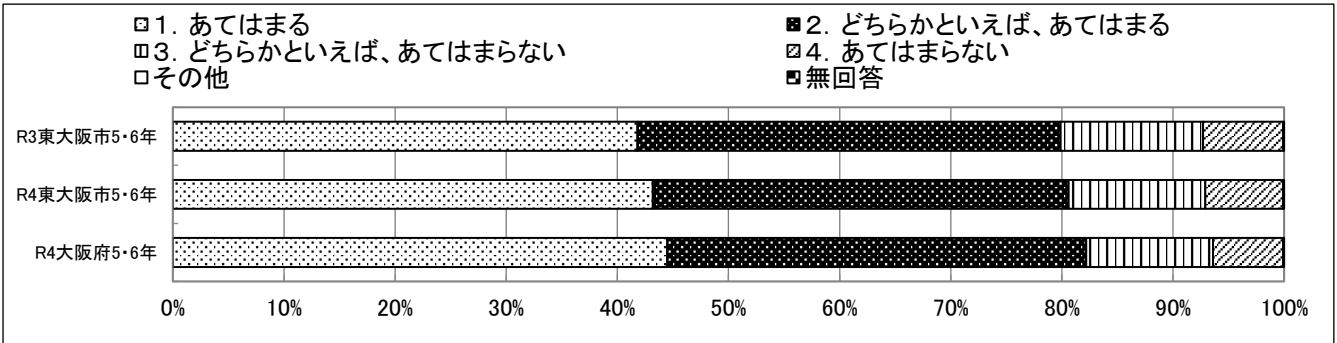
理科について

- 正答率の低かった問題・・・大問1(4)
 東大阪市:43.5% 大阪府:46.6%
- 無回答率の高かった問題・・・大問2(4)
 東大阪市:14.0% 大阪府:10.8%
- 評価の観点別では知識・技能の平均正答率が大阪府との差が一番大きい

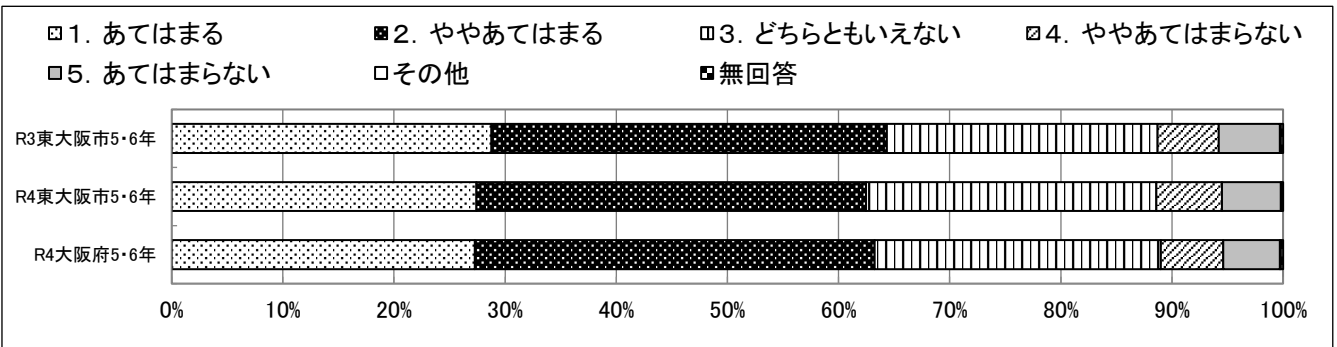
・これまで、小学校理科の特色でもある観察、実験の充実を図り、問題解決の過程を通じた学習活動を重視してきた。問題解決の過程として、自然の事物・現象に対する気づき、問題の設定、予想や仮説の設定、検証計画の立案、結果の処理、考察、結論の導出といった過程が考えられる。この問題解決のそれぞれの過程において、どのような資質・能力をめざすのかを明確にし、指導の改善を図っていくことが重要である。

児童アンケートより

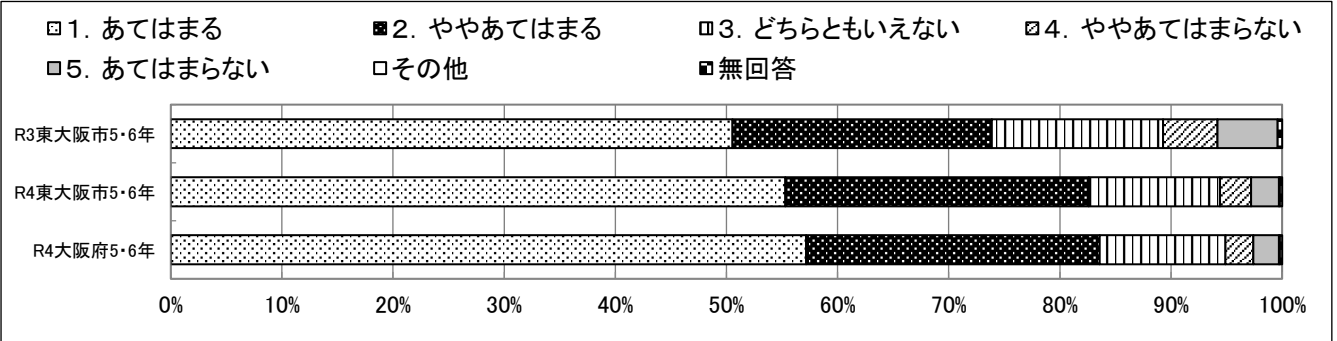
自分には、よいところがあると思う。



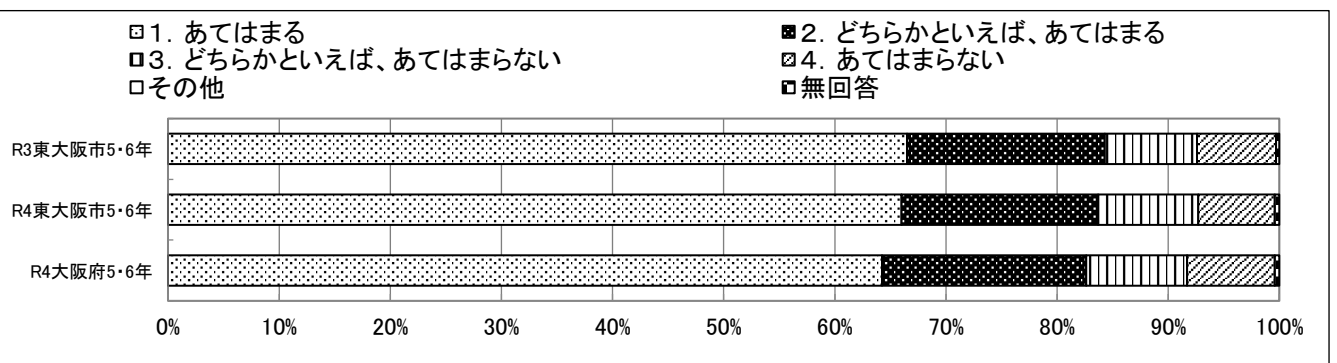
頑張り屋である



人が頑張っているのを見たり聞いたりすると、応援したくなる

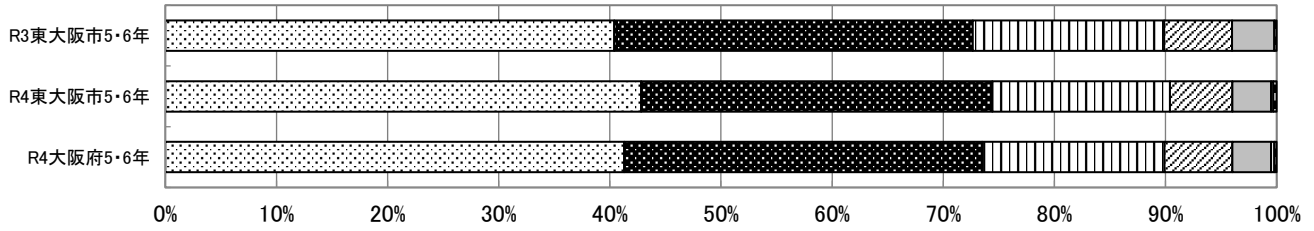


将来の夢や目標を持っていますか。



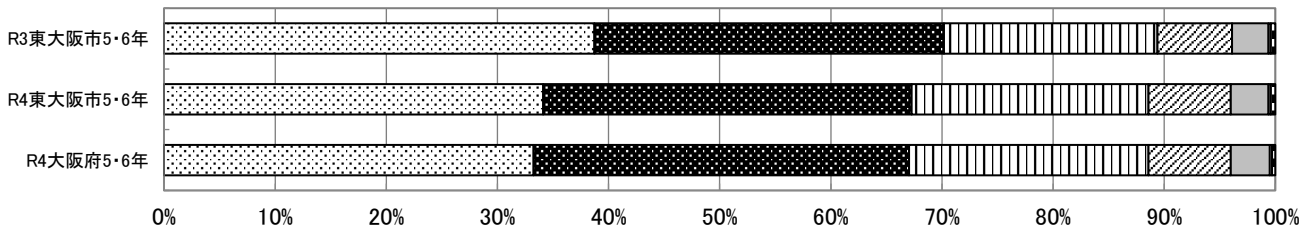
休み時間と授業時間との気持ちの切りかえができる

1. あてはまる 2. ややあてはまる 3. どちらともいえない 4. ややあてはまらない
 5. あてはまらない その他 無回答



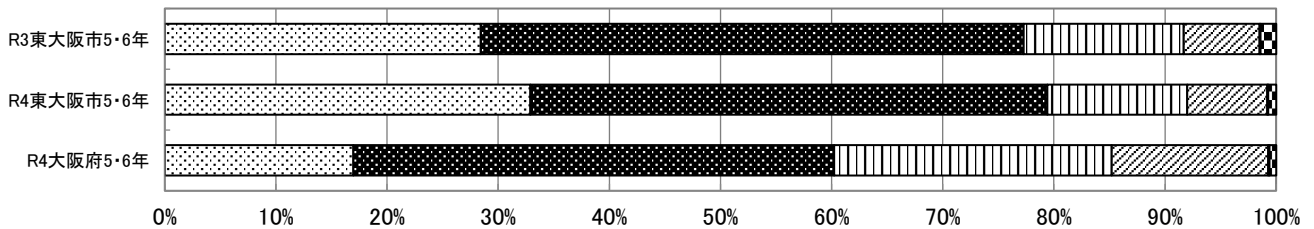
自分の気持ちを態度や表情に出す

1. あてはまる 2. ややあてはまる 3. どちらともいえない 4. ややあてはまらない
 5. あてはまらない その他 無回答



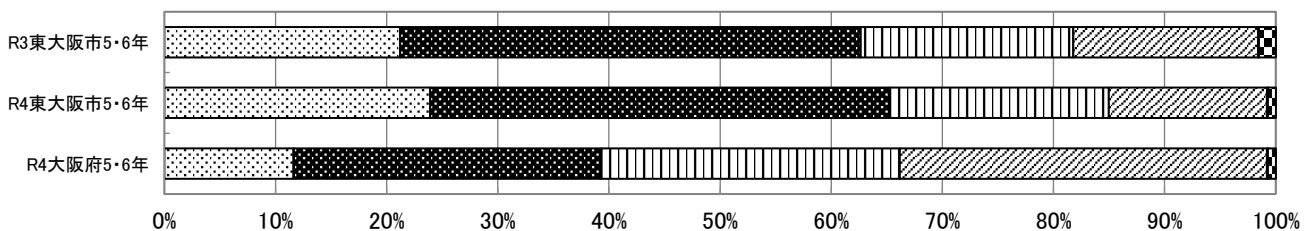
授業で、コンピューターやタブレットを使って、必要な情報を調べることはどれくらいありますか

1. ほぼ毎日 2. 週1回ぐらい 3. 月1回ぐらい 4. ほとんどやっていない その他 無回答

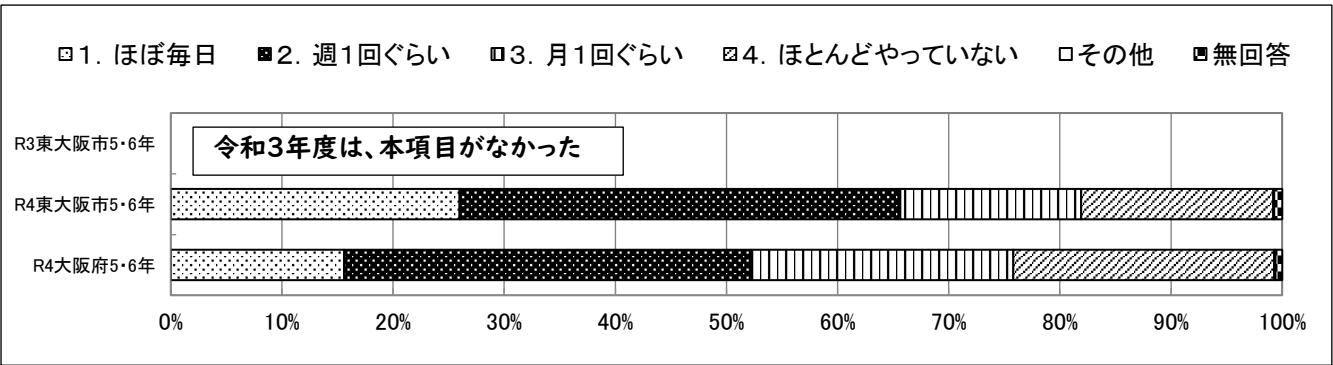


授業で、コンピューターやタブレットを使って、自分の考えを書き込んだり、友だちと意見を交流したいすることはどれくらいありますか

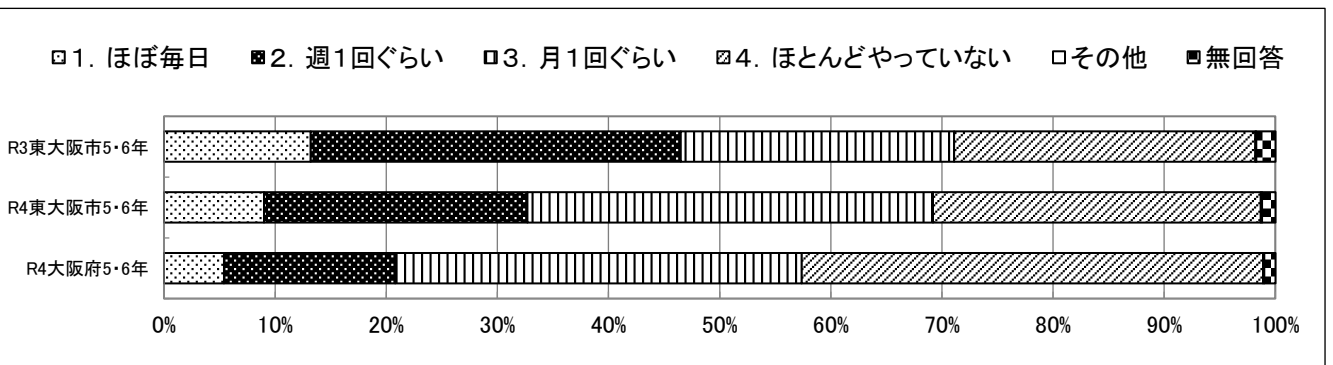
1. ほぼ毎日 2. 週1回ぐらい 3. 月1回ぐらい 4. ほとんどやっていない その他 無回答



授業で、コンピューターやタブレットを使って、自分にあった問題やドリル等に取り組むことはどれぐらいありますか



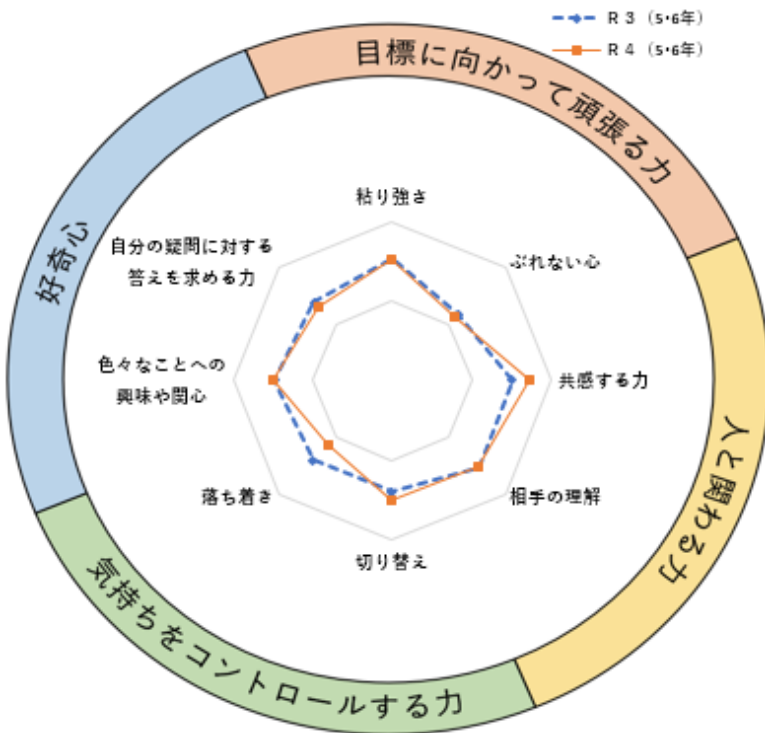
授業で、コンピューターやタブレットを使って、プレゼンテーション資料等にまとめて発表することはどれぐらいありますか



- 自己肯定感や他者理解に係る項目については、肯定的回答率が高い。これは、本市の重点目標である「人間尊重に徹した人権教育の実践」において、人権がもつ価値や重要性を直感的に感受し、共感的に受けとめる感性や感覚を育成してきたことが一つの要因であると考えられる。今後も、知的理解・人権感覚を基盤とした人権学習を通して、自分や他者の人権を守ろうとする意識や態度を向上させて、行動力や実践力を育成する必要がある。
- 授業中に、コンピューターやタブレットを使うことに係る項目は、大阪府の平均を大幅に上回っている。このことは、本市においては一人一台端末が、文房具として日常的に活用していることを示している。また、本市策定の「ICTを活用した教育の推進に関する基本方針」に挙げられている「個別最適な学び」「つながり互いに高め合う学び」「ICTを用いて創造し、表現する学び」が着実に実現しつつあることがうかがえる。



未来に向かう力と好奇心 <同一学年(令和3年度5・6年生と令和4年度5・6年生)の比較>



同一学年のポイントの推移を表しています。

※ポイント:児童一人ひとりの回答から平均を算出し、その平均を項目の合計で除して百分率で換算した値
(ポイント=平均÷合計×100)。

得点率	R3 (5・6年)	R4 (5・6年)
粘り強さ	76.0	75.3
ぶれない心	58.5	56.0
共感する力	75.0	86.0
相手の理解	77.0	76.0
切り替え	70.0	74.7
落ち着き	70.7	57.3
色々なことへの興味や関心	74.0	75.3
自分の疑問に対する答えを求める力	69.7	66.0

○「未来に向かう力」と「好奇心」について

「未来に向かう力」を構成する3つの力と「好奇心」は、それぞれを2つの要素にわけて質問内容を設定しています。

[未来に向かう力]

① 目標に向かって頑張る力 (要素:粘り強さ・ぶれない心)

自分の目標が明確にわかっており、それを実現するために何をすればいいのかを理解し、実行に移すまじめさや忍耐力を持っている状態。ほかの誘惑等にも負けずに自身を律することができる。

② 人と関わる力 (要素:共感する力・相手の理解)

他者と友好関係を築くことが容易であり、親しみやすい性格で、他者の立場に立って相手を理解しようとすることができる。また、他者の気持ちを思いやることもできる。

③ 気持ちをコントロールする力 (要素:落ち着き・切り替え)

常に気持ちが安定しており、ものごとをゆったりと気楽に構えることができる。大きな出来事にも動じず、怒りや不安、憂鬱さやわがままといった感情にあまり振り回されず、情緒が安定している。

[好奇心]

好奇心 (要素:色々なことへの興味関心・自分の疑問に対する答えを求める力)

色々なことに興味を持ち、新しいことに進んで取り組んだり、挑戦したりすることができる。また、1つのことについて、じっくり調べたり、考えたりすることで理解を深めようとすることもできる。

わくわく問題等

大阪府のホームページ上にウェブアップされています。

<https://www.pref.osaka.lg.jp/shochugakko/sukusuku/index.html>

